

各ワーキング 令和6年度中間報告

II 学齢期の福祉教育を考えるワーキング

1 目的

教育機関と福祉機関が協働で進める障害理解教育の教育内容，教育手法を検討することにより，調布市における障害理解（多様性を認め合う社会の実現）の発展を目指す。

2 ワーキングにおいて取り組む主要内容について

- ・調布市内の小・中学校に実施した調査結果をもとにヒアリング調査を行い，より深く福祉教育に対する教育現場の課題を具体化する。
- ・福祉教育の中で障害理解教育を実施する目的や意義，教育内容，教育方法について検討する。
- ・教育と福祉が協働で行う障害理解教育の運営方法について検討する。

3 ワーキンググループメンバー(敬称略)

- 座長 谷内 孝行 (桜美林大学 健康福祉学群 准教授)
高江洲 幸男 (当事者)
佐々木 翼 (当事者)
樋川 宣登志 (調布市立第一小学校 校長)
原田 勝 (調布市教育委員会指導室 副主幹)
毛利 勝 (特定非営利活動法人調布心身障害児・者親の会)
田村 敦史 (社会福祉法人調布市社会福祉協議会 市民活動支援センター)
大光 加奈子 (社会福祉法人調布市社会福祉協議会ドルチェ)
吉野 強 (社会福祉法人調布市社会福祉事業団 調布市障害者地域生活・就労支援センターちょうふだぞう)

4 今年度の検討経過

第1回ワーキング

(開催日) 令和6年6月10日(月) 18時から20時

(開催場所) 空と大地と

(出席者) 委員6名 事務局7名

(内容)

- ① 今年度の，学齢期の福祉教育を考えるワーキングの目的・方針・成果目標を共有
- ② ヒアリング調査を実施する訪問校選びや質問項目についての意見交換
- ③ 福祉教育（障害理解教育）の授業について，どのような方針で取り組むべきか意見交換

(主な意見)

1. 福祉教育（障害理解教育）のヒアリング調査について（調査項目も含め）

- ・東京オリンピックパラリンピックが開催される前は、ボッチャや車いすバスケットなど、パラリンピックにちなんだ内容が多かった。特別な予算がついていたため、力を入れるきっかけになっていた。
- ・福祉教育アンケートを実施した学校の中で、オリンピックやパラリンピック以外の内容で福祉教育に力を入れている小学校2校、中学校1校を対象にヒアリング調査を実施すると、どのような内容で行なっているのかを知ることができると思う。
- ・福祉教育に取り組む時間数はクラス数の多さ、支援級の有無が影響すると思われたが昨年度のアンケート結果を見るとあまり影響はなかった。
- ・支援学級や特別支援学校との交流も福祉教育の一つである。
- ・福祉教育を継続的に実施するとした場合、方法やツール、手段などに焦点をあてて学校側に質問しても良いと思う。ヒアリング調査を行うことで、学校の現状を把握することができ、教育と福祉の連携に繋がると良いと思う。

2. 福祉教育（障害理解教育）の授業を実施するための指導案について

①ねらい、目的

- ・60分の授業時間では「自分たちの住む社会には、さまざまな人がいることを知り、街にはまだ不便がある」に焦点を当ててみてはどうか。限られた時間で理解まで求めることは難しいと思う、90分は長すぎて児童の集中力に限界がある。

② 導入

- ・障害の社会モデルの『障害』を最初から捉えることは難しい。『障害』を他の言葉に置き換えることで伝わりやすくなると思う。また、社会モデルの捉え方を伝える際にも伝えやすくなるかもしれない。
- ・運営方法や授業の進め方など、教育関係者に協力してもらいながら作成することにより、児童に興味を持ってもらえるプログラム作成につながると思う。
- ・小学校4年生には「障害」とは何かを伝えることは難しいと思うが、教師や運営側が障害の社会モデルのねらいを知っておくことは大切である。

③ 授業内容

- ・昨年12月に小学4年生を対象とした第一小学校での授業は長時間のプログラムだった。この授業展開では児童の興味には繋がらないので、さらなる工夫が必要だと思う。
- ・当事者からの生の語りは大切であると思う。動画だと本来伝えたいことは伝わりにくいのではないか。どのような不便があるのか、どのような生活をしているのかなど、対話形式があった方がよい。
- ・実際、車いすに乗って操作をすることで、体験を通じて社会の側の「障害」の存在を知ることができると思う。
- ・体験内容も疑似体験ではなく、「椅子を並べて、映画館の車いす席がないバージョンを再現したり、車いす利用者がどのように利用するかをクイズ形式で実施する」や「当事者

2名と児童が自動販売機で飲み物を購入するなど、それぞれの不便や工夫点等を比較しやすい状況を作る」等があると具体的な気づきとなる。

(まとめ)

昨年実施した福祉教育アンケートをもとに福祉教育の実施時間が多かった学校を対象にヒアリング調査を行うことになった。調査では、福祉教育の運営方法や取組内容、現在課題と感じている内容などを中心に実施する。また昨年度、小学4年生を対象に実施した福祉教育のプログラムについては内容が難しい部分があったため、時間配分や言葉選び等、教育分野の先生方の意見を伺いながら作成する。

第2回ワーキング

(開催日) 令和6年9月25日(水) 18時から20時

(開催場所) 空と大地と

(出席者) 委員7名 事務局5名

(内容)

- ・調布市の福祉教育(障害理解教育)の取組み(教育委員会指導室 原田副主幹より)
- ・昨年実施したアンケートをもとに実施したヒアリング調査の結果報告
- ・障害理解教育の指導案について意見交換

(主な意見)

1. ヒアリング調査の結果報告について

昨年度実施した福祉教育(障害理解教育)のアンケート結果をもとに取り組んでいる時間数が多い学校(小学校2校, 中学校1校)に訪問し, ヒアリング調査を実施した。主に, 事前事後の学習, 内容を含めた取組み状況について聞き取り調査を行った。

- ・学校内で特別支援学校や支援級との交流する機会を設けていた。障害の有無に関わらず交流を通して, 関係を構築することは大切である。
- ・総合的な学習の時間で福祉教育を取り組むことが多い。教材や発表方法も変化してきていて, タブレットを使用したり, 動画を用いたりすることも多いことが分かった。
- ・A中学校の取組みとして, 1年生では「障害理解」を中心に調べ学習が行われていることが分かった。情報を提供するだけでなく, 自分で調べることで, より理解に繋がると感じた。
- ・今まで体験型で福祉教育を継続してきた。学校のみでは児童の教育は難しくなってきた。動画コンテンツや当事者との交流など, 新しい教材があると, 児童や生徒に新しい発見に繋がると思う。
- ・学校間の情報共有として, 調布市内で教科研究会という取組みがある。
- ・「障害理解」や「人権」に特化した授業を考えていいと思う。その上で疑似体験や交流をすることで, 児童や生徒の障害理解が進む可能性があると思った。

2. 福祉教育（障害理解教育）の授業を実施する指導案の作成について

「障害の社会モデル」「障害理解」の考え方を知らせてもらう授業を実施するため、指導案の作成を開始する。限られた時間の中で、まずは「私たちが生活している社会には多様な人たちが暮らしていることを知る」「誰もが暮らしやすい地域づくりを考える」を目的にイラストや写真などを用いて、児童たちが自分で考える授業内容を検討した。

- ・前回第一小学校で実施した授業では、内容を詰め込み過ぎて、理解には繋がることは難しかった。しかし、障害理解までは至らなかったとしても、知る、考えることに繋がられるといい。
- ・ワークとしては、児童の身近なところ（駅、コンビニ、小学校など）をイラストや写真を用意して発見してもらうことで、イメージが付きやすい。またワーク以外に人形や動画など動くコンテンツがあることで、興味に繋がると思う。
- ・授業は前半にワークシートを使用しながら実際にグループワークで話し合い、後半は障害当事者講師が登場して、質問形式で児童と対話をする方式はどうか。
- ・教材の活用方法や教材の保管方法なども今後検討していきたい。

（まとめ）

調布市の教育プランや各校のヒアリング調査を通じて、学校側の福祉教育の現状をより具体的に知れた。また、これまでのワーキングでの取り組みを学校にも共有することができた。

またワーキング内で考えている福祉教育（障害理解教育）の授業を実施するための指導案を作成していく中で引き続き児童の興味の引き出し方や授業内容などについて、教育関係の方々に協力してもらいながら検討する。そして、今年度も第一小学校の小学校4年生に向けて授業を実施することが決まった。そこで、ワーキングで作成した福祉教育（障害理解教育）の授業を実施するための指導案をもとに授業を行い、昨年度との児童の反応の比較、授業の進行など、ワーキングで振り返りをしていきたい。

6 ワーキングの到達点

調布市の福祉教育（障害理解教育）の状況を知るため、昨年度実施した福祉教育（障害理解教育）のアンケートから小学校2校、中学校1校に対し、授業の運営方法などについて聞き取りに行った。この調査を通じて、学校の障害理解教育の状況について、知ることができた。また3校のみではあったが、ワーキングの取り組みについて共有し、学校と意見交換ができたことは今回の取り組みの成果の一つである。

また福祉教育（障害理解教育）を実施する目的や意義、教育内容、教育方法について検討する中で、教育関係者とともに障害理解教育の授業（小学校4年生を対象）で使用する指導案を作成した。「障害の社会モデル」「障害理解」について、どのような方法で伝えていくか、昨年度の課題である時間配分や興味を持ってもらう方法等を検討していく中で、「今暮らしている地域には多様な人たちがいることを知らせてもらい、誰もが暮らしやすい地域づくりについて考える」という内容に至った。ワーキング内で検討を続け、実際の授

業ではイラストや写真などを用いて、「障害」になる部分はどこかワークを行い、障害当事者の講師と対話を行う方式で実施した。授業中の児童の反応をみたところ、個人に焦点が当たってしまう場面もあり、今後も検討が必要となる。一方で当初の目的の一つである「私たちが生活している社会には多様な人が暮らしていることを知る」という授業の狙いは達成されたと思われる。この授業終了後も児童が暮らしていく上で継続して考えて欲しい。そして、授業にとどまらず自宅に帰ってからも児童から保護者などと授業内容を共有し、気づきの循環にも期待したい。

今年度も教育関係の方々が関わっていただいたことで専門的な立場から意見交換ができた。継続的に教育と福祉が意見を取り交わし、協働していくことの意義について改めて、確認した。今回ワーキングで作成した指導案をどのように学校に広めていくかなど、普及啓発していける方法を検討していきたい。